堀川 かくれ 産業・土木遺産

藩をあげての大土木工事
御用水と御用水跡街園

黒川沿いの散策路として親しまれている御用水跡街園は、高度成長と都市の急速な拡大により惨憺（さんたん）たる姿になっていた水路を埋めて街園に整備し、昭和 49 年に完成したものだ。かつてはお城の堀などへ庄内川の水を送る御用水が流れていた所である。

名古屋城のお堀とその北に広がる御深井（おふけ）の庭（現：名城公園）の蓮池は、名古屋台地の下に位置し城の防衛上重要なエリアだ。そこは築城当時は豊かな湧き水に恵まれていた。しかし、台地上に城下町ができると湧き水も減り、水位も下がってお城の一大事となった。これを解決するため、寛文 3 年(1663) に御用水が開削されたのである。龍泉寺近くの川村（現：守山区）で庄内川から取水し、西へ流して矢田川に流入し、対岸の辻村（現：北区辻町）で矢田川の水と一緒に取り入れて蓮池や堀に注入する水路だ。13 年後には矢田川伏越（ふせこし）が出来、流砂の少ない庄内川の水だけが流れるようになった。執政（家老）の竹腰正晴が総裁となり、工事は普請奉行の蔦木伊兵衛等が担当した、藩を挙げての事業である。

御用水開削の翌年（1664）にはお堀を水源とする巾下水道が完成した。大正初期に近代的な水道が整備されるまで、西区の幅下から中村区の名駅南までの広い地域に給水していた。また、流路途中に何か所か取水口を設け、近隣の村々へ農業用水を送ってもいたのである。

建　設　御用水：寛文 3 年（1663）
　　御用水跡街園：昭和 49 年（1974）
所在地　北区上飯田通三丁目（夫婦橋）～猿投町（猿投橋）
管理者　名古屋市
規　模　御用水跡街園　幅：9 ～ 11 m、延長：1.7 km

堀川の風景を画する　猿投橋落差工

堀川 かくれ 産業・土木遺産

猿投橋の落差工　堀川の感潮域はここまで

建　設　昭和 6 年 4 月～ 8 年 12 月
所在地　北区猿投町
管理者　名古屋市
規　模　約３mの落差工

猿投橋の下に、高さ3mほどの落差工と呼ばれる滝のようなものがある。ここを境界にして黒川の風景は大きく変わっている。

落差工より上流は川岸から水面までが近く護岸は草生えの土手で、田舎を流れるのどかな川といった風情（ふぜい）だ。下流は水面までが遠く、切り立った護岸となり、都会を流れる排水路といった印象を受ける。

大正期に入るころから、北区の市街化に向けた耕地整理事業が進み、黒川の排水能力を向上させる必要が生じた。田園地帯なら大雨が降っても田圃が水を蓄え、一気に川へ雨水が流入することはないが、市街地になり家屋が建ち並ぶと、これまでの黒川では洪水の危険がある。

そのため、大幸川が流入することで流量が増える猿投橋から朝日橋までの 2,874 mの区間で、河床を3～4 m掘り下げ、屈曲を修正して川幅を広げ、護岸を整備し橋を架け替える、といった大改修が昭和6～8年にかけて行われた。この改修によって、工事終点の猿投橋に落差工が造られることとなったのである。

浚渫して河床を下げたので、それまで名古屋城西の朝日橋で終わっていた潮の干満の影響が、猿投橋まで及ぶようになった。